



Title	「自分」の再帰的な用法に関する考察
Author(s)	黄, 銘君
Citation	研究論集, 24, 193 (左) -204 (左)
Issue Date	2025-01-24
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.24.l193
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94036
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_rjgshhs_24_p193-204_l_1.pdf



「自分」の再帰的な用法に関する考察

黄 銘 君

要 旨

これまでの研究では、日本語の「自分」を再帰標識 (reflexive marker, RM) として認められてきたこともある (E.Geniušienė 1987, Hirose 2014)。本稿では、多様な用法を持つ「自分」に着目し、その共起関係と文法的振る舞いを明らかにすることを目的としている。

E.Geniušienė (1987) は再帰標識を広義に定義し、リトアニア語やロシア語などの再帰的接辞だけでなく、動詞の接辞や助詞、代名詞などの要素も含めて考察している。この広義の定義に基づき、日本語の「自分」も再帰標識の一種として捉えられる。Hirose (2014) もまた、日本語には「自分」や「己」、
「自ら」など、多様な再帰代名詞に相当する語が存在し、これらが再帰標識として機能することを指摘している。

しかし、「自分」は再帰代名詞としての機能に加え、一人称単数代名詞や対称詞としても用いられる多様な用法を持つ。本稿は再帰標識としての「自分」の有効性を検証するものではなく、むしろ「自分」の多様な文法的機能に焦点を当てたものである。

本稿では、まず先行研究における「自分」の用法を概観し、それぞれの文法的特徴を明らかにした。また、「自分」の再帰的用法を考察するために、「自分」が主格名詞句、対格名詞句、与格名詞句に生起する場合を分類し、その文法的振る舞いを分析した。その結果、主格名詞句に生起する場合には、照応的用法と照応的ではない用法に大別できることが明らかになった。さらに、対格目的語としての「自分」は主に精神的領域を示すが、物理的な行為や動作にも用いられることがあることを示した。

また、与格名詞句における「自分に」が再帰的用法に該当するかどうかは、「自分に」そのものの特性ではなく、動作の着点を示す与格名詞の性質に依存することを指摘した。

1. はじめに

E.Geniušienė (1987: 25) は言語類型論から再帰性を考察しており、その中で再帰標識 (reflexive marker)¹ を広義に定義している。この定義によれば、再帰標識 (RM) とはリトアニア語の「-si/-s」やラトビア語の「-s」、ロシア語の「-sja-s'」などの再帰的接辞に限らず、動詞の接辞や語尾など、さらにはその環境に存在する助詞や代名詞などの要素も含まれる。また、E. Geniušienė (1987: 303) では語や句も再帰標識 (RM) になり得るとされており、日本語の「自分」は再帰標識 (RM) の一種として捉えている。

Hirose (2014: 3) は日本語には「自分」、「己」、「自ら」、「自身（特に「自分自身」や「彼自身」のような形で）」、そして「我」など英語の再帰代名詞に相当する様々な「self」を表す語が存在し、これらはいずれも再帰標識 (RM) として使用できると述べている。

しかし、「自分」の用法は多様で、再帰代名詞という用法しか持たないのではなく、一人称単数代名詞としても用いられ、関西弁、山梨方言などでは「どうしたん自分」のような対称詞として用いられることもあるため、従って、本稿では、「自分」を手掛かりにし、「自分」の共起関係と文法的振る舞いを明らかにすることを目的とする。

2. 「自分」に関する先行研究

日本語の「自分」という語は主に再帰的用法 (reflexivity)、視点的用法 (viewpoint) 及び話者指示的用法 (logophoricity) の三種類に分類される。話者指示的用法における「自分」は、引用節の内部に現れると考えられる。引用節の外部に現れる「自分」には (1) と (2) のような視点的用法と (3) と (4) のような再帰的用法が存在する。視点的用法と再帰的用法を区別する上で重要な要因としては、「自分」を「彼」などの代名詞に置き換え可能かどうかである。視点的用法では、「彼」などの代名詞に置き換えることが可能である一方、再帰的用法では「自分」を「彼」などの表現と置き換えることは不可能である。(廣瀬 2009, Hirose 2014)。

- (1) 春男_iは、{自分/彼_i} が友達から借りた本を夏子に売った。(視点的用法) (廣瀬 2009: 160)
- (2) 秋生は自分が友達から借りた本を無くした。(視点的用法) (Hirose 2014: 6)
- (3) 春男_iは、{自分/* 彼_i} を責めた。(再帰的用法) (廣瀬 2009: 161)
- (4) 秋生は自分を批判した。 (Hirose 2014: 6)

¹ 本稿では便宜上、以降の文中で「RM」と略記する。

- (5a) 春男は、自分は気が弱いと言っている。(話者指示的用法) (廣瀬 2009：153)
(5b) 春男は、彼は気が弱いと言っている。 (廣瀬 2009：153)
(6) 秋生は自分は頑固だと言っている/思っている。(話者指示的用法)
(Hirose 2014：6)
(7) #春男は、自分は頑固だと言っているが、それが自分だとは気づいていない。(話者指示的用法) (廣瀬 2009：161)

(1), (2) では「自分」は「視点的用法」として使用されており, 「自分」を含む節が話し手が指示対象とする人物の視点から出来事を記述していることを示す。すなわち, (1), (2) は話し手自身の視点ではなく, 「春男」や「秋生」の視点から「売った本」や「無くした本」について記述していることを表す。しかしながら, その視点的用法では, 自分を含む節が記述する状況が必ずしも「自分」の指示対象によって認識されていなくても成立しうることが指摘されている。例えば, (1) の文に「その本が自分が友達から借りたものだとは気づいていない」という文脈を付け加えてもよく, また (2) では無くした本が自分(秋生)が友達から借りたものであることを認識していないという解釈も成り立つ。しかし, (7) の例が示すように, 話者指示用法においては, 「自分」を含む節の内容をその指示対象は認識している必要がある。(廣瀬 2009, Hirose 2014。)

(3) と (4) の「自分」はそれぞれ先行詞である「春男」と「秋生」という人物を指し示している。このように, 述語の主語と目的語が同じ指示関係を示す再帰標識として機能を果たすものは「再帰的用法」に分類される。ただ, 「自分を批判した」は必ずしも「秋生」を指すとは限らない点には注意されたい。例えば, 「秋生は自分を批判してきた」という場合, 無論, 「てくる」という補助動詞を用いることで, 「自分」に向かう動作の方向性は明示でき, 「自分」は必ず「私」のことを指す。もし方向性が明確でない場合には, (4) の「自分」が必ずしも「秋生」を指すとは限らず, 話し手である「私」を指す可能性もある。

(5a), (6) のように, 発話, 思考などを表す動詞の間接話法補部で使われる「自分」は「話者指示性用法 (logophoricity)」と呼ばれる。しかし, (5a) における「自分」は必ず主語である春男を指すのに対し, (5b) の彼を「春男」と解釈するのは難しいと考えられる。

Hirose (2014) によれば, 「自分」は, 「自己の客体化」というプロセスを経て, 話者指示的用法から, 視点的用法, 再帰的用法へと拡張していくとされている。話者指示詞が伝達の主体である「公的自己²」とは異なり, 内的な思いの主体である「私的自己³」を示すのに対し, 視点的

² 廣瀬 (2009) では, 「公的自己」を「聞き手と対峙する伝達の主体としての側面であり, 言語の伝達の機能に対応する言語表現のレベルである」と定義している。

³ 「私的自己」とは「聞き手の存在を想定しない思考・意識の主体としての側面であり, 伝達を目的と

用法の「自分」は「話者の『客体的自己』⁴」(objective self)、また、再帰的用法は、「動作主の『客体的自己』」を表すと述べている。つまり、動作主(話し手ではない)が自己の意識から切り離し、他者として扱う場合の自己を示すのである。

小葉(2017)は再帰用法の「自分」が示す述語に対する意味制約について考察し、「自分」が直接目的語だけでなく、間接目的語としても用いられる事例を含め検討している。

3. 問題提起と本稿の位置づけ

以上の先行研究から日本語の「自分」の用法が多岐にわたり、文脈により「自分」が再帰的用法として機能するかどうか異なることが確認できた。本稿では、日本語の再帰用法は意味的な特徴しか持たず、形態的な再帰標識は存在しないと考える。一方、「自分」のような統語的な標識のみが機能することは先行研究において日本語の再帰標識の特徴としてまとめられている。

ところが、先行研究の中では以下のような課題が見出されている。

- (8) Hirose (2014) などでは、「自分」「自ら」などの再帰標識の多様性について説明されているが、目的語の位置に生起する用例のみが中心に考察されており、与格名詞句に生起する「自分」の文法的な振る舞いについての考察はほとんど行われていない。
- (9) 小葉(2017)は「自分に」の用例を検討しているが、日本語が英語とは異なり、「に」で標示された与格が必ずしも項であるとは限らず、着点を示す場合もある。例えば、「買う」、「かける」、「誓う」などで「自分に」と生起する場合に、それを間接目的語として扱うのは適切ではないと考えられる。したがって、与格名詞句に生起する「自分に」の再帰用法を再検討する必要がある。

以上の課題を踏まえ、考察に入る前に、「自分」の再帰的用法に関する概念を明確に定義しておきたい。

なお、本稿では、「自分の再帰的用法」を同一節内で先行詞と指し示す対象が同一である「自分」の機能だけでなく、「春男は自分を責めた(例3)」のように、述語が示す動作あるいは状態が行為者自身に向けられることを表すものとして定義する。

しない、言語の思考表現機能に対応する言語表現のレベルである。公的表現と私的表現の根本的な違いは、前者は聞き手の存在を前提とするが、後者は前提としない」点にある。(廣瀬, 2009)

⁴ 主体としての話し手から切り離されて、他者と同じ側におかれる自己のこと。(廣瀬, 2009)

4. 考察

次に「自分」⁵を考察対象とし、現代日本語書き言葉均衡コーパス「BCCWJ」を利用し、「自分」を含む例文を収集し、「自分」がどのような文法位置に生起するかを明らかにするとともに、再帰的用法を持つ用例に焦点を当て、その用法を分析していく。本稿では主に主格名詞句、対格名詞句、与格名詞句における例文を抽出するが、起点格や造格名詞句⁶に「自分」が生起する例も観察されるため、これらは本稿の考察対象から除外する。

4.1 主格名詞句に生起する「自分」

- (11) セスは自分がふたりの邪魔になることも考え合わせてみた。

(『恋人たちの航路』 LBs9_00206)

- (12) 評価というのは他人や世間がするもの。自分が自分をいくら評価しても、他人が評価してくれなければ、世の中はどうにもならない。

(『ワルの知恵本』 OB6X_0003)

統語形態論的には(11)と(12)はいずれも「が」格でマークされており、文の「主語」として機能している。(11)では、「自分」が「セス」という先行詞と照応しているため、照応的用法として解釈できる。一方、(12)の前述部分に登場する「自分」には照応する先行詞が存在しないため、これは話者自身を指す「自称詞」としての用法と考えられる。また、(12)の後述部分に現れる「自分」は同じ指示対象を指しつつ、主格名詞句と後接する対格名詞句との間で再帰関係を形成しているため、再帰的な用法であると解釈される。

さらに、意味論的観点から見ると、主語をマークする「が」格は動作または行為の主体を示す意味役割を担っている。しかし、文脈によっては、その動作が最終的に自身に向けられるかどうかが明確でないことがあるため、主格名詞句に生起する場合には、照応的用法と照応的ではない用法に大別することができる。また、コーパスから検索された用例を分析した結果、照応的ではない用法において、「自称詞」として用いられることが少なくないことが明らかになった。

⁵ 本稿では、関西弁など中での「自分」などは研究対象から除外する。

⁶ 以下の例は造格名詞句に生起する「自分」の用例である。

(10) 筆にも自信があるので私が自分で書くつもりです。(OC10_01922)

この例では、「自分」が連用修飾語として造格に生起している。(10)の「自分で」は行為者である「私」の意志性を表す副詞的な用法であり、「つもりだ」のようなモダリティ意志助動詞が共起できることがわかる。

4.2 対格名詞句に生起する「自分」

- (13) 主演するだけでなく、脚本も書かなければならないので、自分を追い込んで頑張ります。
(『Yahoo! ブログ』 OY04_03556)
- (14) 過去のものは僕を安心させました。過去のものは、決して自分を裏切らない。
(『カフェー小品集』 PB39_00435)
- (15) はんぱ断食を1週間ほど実行して、6日目以降は5日目と同じ献立終了した夜、「よくやった、よくやった」と自分で自分をほめながら、ほうれん草をちょっと油でいためて、しょう油と砂糖少々で味つけた。
(『こんなにヤセていいから』 OB3X_00124)

「自分」の後ろにつく述語には、具体的な動作や行為を表す動詞よりも、精神的な働きかけを表す動詞が多い傾向が見られる。また、「自分」を目的語にとる動詞の具体的な例としては、「自分を責める」、「自分を非難する」、「自分を磨く」、「自分を守る」、「自分を殺す」、「自分を許す」、「自分を失う」、「自分を追い込む」、「自分を裏切る」、「自分を抑える」、「自分を褒める」などがある。これらはいずれも抽象的行為を示す述語であるが、対格をとる目的語は自分の物理的な体だけではなく、知覚、記憶、意識、認知などの精神的能力を伴う非物理的領域と考えられる。前節で定義した「自分」の再帰的用法に基づき、このような例はすべて再帰的用法と見なすことができる。

ただ、ここで「自分」と共起する動詞が「褒める」の場合に、「自分を褒めた」より「自分で自分を褒めた」というような二重自分構造 (The double-zibun construction) の方がよく使われると考えられる。例えば、「太郎が自分を褒めた」といった前後の文脈がないと、その「自分」は「太郎自身」と解釈してもよいし、「話し手」(私) を指すこともできるだろう。無論、「普段自分に自信がないんだけど、太郎が自分を褒めてくれたんだ」のように、授受表現の「くれる」をつけると、方向性を示すことで、「自分」は「私」を指すことが明確に判断できるが、「自分で自分を褒める」の場合だと、自分が立てた目標などを達成した後、自分にプレゼントを買ったりして、自分で自分を楽ませることを表す。

ただ、以下の例文の示すように、授受表現の「あげる」あるいは「やる」に置き換えると、話し言葉でよく使われる「自分を褒めてあげる/やる」がほとんど必ず、再帰的に「自分自身を褒める」という意味で使われるように見られる。

- (16) 成績良かった自分を褒めてあげる。(作例)

なお、Hirose (2014: 17) によれば、以下のような物理的な行為や動作を表す述語であっても、

「二重自分構造」(the double-*zibun* construction)では容認されると述べている。

(17) ?? ケンは自分を {殴った/叩いた/蹴った} (Hirose 2014 : 17)

(18) ケンは自分で自分を {殴った/叩いた/蹴った} (Hirose 2014 : 17)

(17) (「自分を殴った」)は他動性が高く、一般的に強い意志性を持って、自分の体を傷つけることなどは考えないが、文法上の不適格にならないものとして扱う。

一方、(18)の「自分」は他者として捉えることが可能であり、「自分で」を用いることで、客体化した自己と意識主体⁷を遠ざけ、他者と同列に並べる役割を果たすと解釈できる。このように、(16)では、自分のことでありながら、あたかも自分が他人であるかのように自分を殴ったり蹴ったりするイメージが示されている。(Hirose 2014 を参照)

Generally, *zibun-de* means “by one’s own agency” and implies “without the help of others”. Its function is to emphasize the agent’s independence and separation from others, so it may be referred to as an “emphatic agentive marker”. When *zibun-de* highlights the agent’s separation from others, it also has a meaning close to “alone”, which itself is expressed in Japanese by *hitori-de*. (Hirose, 2014 : 18)

(19) 秋生は自分で来た。 (Hirose 2014 : 19)

(20) 秋生は一人で来た。 (Hirose 2014 : 19)

すなわち、「自分で」とは「他人の力を借りずに、自分の力で」という意味であり、それは動作主の独立性と他者からの分離を強調するという機能を持ち、動作主強調マーカーとも呼ばれる。特に他者との対比を強調する場合、「一人で」に近い意味も持ち、(20)のように「ひとりで」を用いて表現ができる。

しかし、(19)と(20)は意味が違ふと筆者は判断する。(19)は「特に移動手段について他人の助けを借りていない」という意味で使われ、徒歩で、他人による運転でもなく、車などを自分で運転し語り手の領域へ移動してきた場面が浮かんでくる。例えば、車を運転できない小さい子供が、徒歩には厳しい距離を移動してきたのを受けて「え、自分で来たの？」のような発話場面が想定できる。(20)の「一人で来た」は、自分の判断でどこかへ行こうと思い、単に

⁷ Hirose (2014) は「意識主体」、「自己」という名詞意味論的アプローチを以下のように述べている。

- a. 人は、(概念的に【意識主体 (subject)】と【自己 (self)】に分けられる。
- b. 意識主体：意識の在り処。知覚・意識・判断などの主体。
- c. 自己：人から意識主体を除いた残りの要素 (e.g. 社会的役割、性格、過去の発言、価値観)。

誰とも一緒に来ていないという意味を含む。一方、(19)は、自分の判断で来たが、一人ではなく、誰かと一緒に来た可能性もあるし、あるいは、自分の判断ではなく一人で来たという二つの解釈が成り立つ。例えば、「自分がここに来ようと思ったか」と聞かれたりするとき、「いいえ、お母さんに行けと言われたから」という場面も捉えるだろう。

つまり、(19)と(20)はいずれも一人で来たことを表すことができるが、後者はその人の移動する判断は自分自身の判断によるものではなく、他人の命令などで仕向けられて来たというような解釈もできるので意味が違っていると判断している。

しかし、下記の例の示すように、述語動詞が具体的な動作を表すものの場合、日本語の「自分」を目的語にとると運用上適切でないものや文法的に不適格になるものが多いと考えられる。

(21) ?ケン是自己で自分を洗った。 (Hirose 2014 : 21)

(22) *ケンはベッドで自己で自分を伸ばした。 (Hirose 2014 : 21)

(23) 太郎は自己で髪を切る。(作例)

(24) 太郎は自己で自分を切る。(作例)

Hirose (2014) は(21)と(22)は不自然である理由として、他人を洗っているかのように自分を洗ったり、他人を伸ばしているかのように自分を伸ばしたりする状況を想像することはあり得ないからだと分析している。ただし、(21)の「自分(の体)を洗う」といった場合、一般的には自分の助けを借りることはなく、「自分で」という表現を用いない方が適切とされる。しかし、ケンが身体障害者であるなどの状況を考慮すると、自分で自分を洗うことが難しい場合も想定でき、その場合には「ケンは自己で自分を洗った?」という疑問文が成立し得ると筆者は考えている。従って、前述のように、物理的な行為や動作を表す述語であっても、二重自分構造(the double-zibun construction)が許容されることがある。ただし、「自分で自分を」という構造は、精神的な領域、物理的な行為のいずれも適用可能であるが、すべての物理的な行為を表す述語において必ずしもが容認されるわけではないことを示唆している。

また、(23)「太郎は自己で髪を切る」という表現について考えると、(24)の例が示しているように、具体的な身体部位が省略されると異なる解釈が生じることが考えられる。(23)では太郎が自ら髪を切るという行為が示されているが、(24)では太郎がナイフなどの刃物で自身を傷つける場面が想像される。つまり、このような述語動詞文において、目的語として具体的な身体部位を明示しない場合、「自分で自己(の髪)を切った」といった意味で異なる解釈が生まれる傾向がある。

4.3 与格名詞句に生起する「自分」

小藁(2017)は再帰用法「自分」が間接目的語として共起する述語については以下の表にま

とめている。

表1 再帰用法の「自分に」と共起する述語（小葉 2017：9）

述語類	例	再帰用法「自分に」の生起
Verbs of Giving	渡す, 提供する, 手渡す, 払う, 贈る, 与える, 授ける, 貸す, 預ける, 売る	*
Verbs of Carrying	もっていく, もってくる, 運ぶ, 届ける	*
Verbs of Communication	教える, 見せる, 伝える, 話す, 示す	*
Verbs of Sending	送る, 撃つ, 投げる, 放つ	OK/? 「へ」, 「宛てに」などが必要
Verbs of Obtaining	買う, 手に入れる, 得る, 稼ぐ	OK/? 「のために」が必要
Verbs of Creation	作る, 焼く, 編む, 建てる, 彫る	OK/? 「のために」があると容認しやすい
Verbs of Placing	かける, ふりかける, つける, 貼る	OK
Verbs of Future Having	誓う, 約束する, 割り当てる	OK
Verbs of Permission	許し, 許可する	Ok

ただし、表に現れる述語はすべて「自分に」との共起によって、「自分」が目的語として振る舞うわけではない。厳密に言えば、日本語において「間接目的語」という用語を用いることは必ずしも妥当ではないと考えられる。英語の場合は、「A gave B the book」のような二重目的語構文が存在するが、日本語には二重ヲ格制約があり、一つの述語が二つの目的語をとることができないためである。（例：*A は B を本を与えた。）本稿では、「間接目的語」という用語を使用せず、「与格名詞句に生起する「自分」という名称を用いることとする。

(25) 太郎は自分に本を買った。

(25) に示されているように、「自分」が「に格」名詞句に生起する場合、それが項であるのか付加詞であるのかを形態論的には判別できない。(25) の「自分に」は太郎が本という対象物を購入したことで、その本の所有権が太郎に移ることを表している。つまり、ここでの「に格」は方向の移動性に関わっており、「自分」は「買う」という動作の移動先である着点として考えられるため、項としては認められない。具体的には、(25) では動作主である太郎が本という対象物に働きかけているだけで、「自分」に直接働きかけているわけではないため、(25) は再帰性を持たないと判断される。

(26) 花子は自分に {水をかけた/名札をつけた}

また、小薬（2018）では（26）を「自分」の再帰的用法として扱っているが、（26）は「花子が自分にイヤリングをつけた」のような例と同様に、「自分の耳」といった具体的な身体部位が明示しなくても成立するものと考えられる。すなわち、（26）では「自分の（体）に」、「自分の（胸）に」といった具体的な身体部位が省略されていると解釈できる。つまり、与格名詞句の場合、「二格」が明示されているかどうかに関わらず、無論、（26）は再帰性を備えているが、その再帰性は「自分に」の特性によって決定されるのではなく、動作の着点を示す与格名詞の性質によって決まると考えられる。

さらに、小薬（2017）によると、表に取り上げられた「渡す、提供する、与える」のような授与動詞は、通常与格標示された「自分」と共起できない述語として扱われるが、実際に共起できる例もあるだろう。下述の説明がこれを裏付けよう。

- （27） 車を降りる時にもはや夜のことで用もなし、面倒だからヘルメットを腰掛の上に置いて出ようとする、真向いに座席を占めた例の怖い顔の男が後から出て来て、そのヘルメットを持ち出して自分に手渡した。」（『宮崎市定全集』LBg2_00024）
- （28） 頑張った自分にご褒美をあげる。（作例）

（28）が示されるように、「自分に」と「あげる」のような三項動詞が共起することから授与動詞でも「自分に」と共起ことが可能であると考えられる。

また、（27）の「自分」は必ず主人公のことを指し、その文脈から「私」が潜在的指示対象であることが判断できる。（27）は照応用法であり、再帰用法ではない。この従属節では視点は描写の基点である主人公（話し手）に置かれているが、後続する主節に埋め込まれたダイクシス動詞「来る」においては、その視点は「男」に移っている。また、主節で「自分」は「その男」を指すのではなく、話し手からの内的描写の中で、求心的運動を示す「来る」というダイクシス動詞が使われることで、視点が再び話し手の主観的視点に移動している。⁸

5. おわりに

本稿では多様な用法を持つ「自分」に着目し、まず、先行研究において「自分」には再帰的

⁸ 澤田（2009）を参照。澤田治美（2009：131）は、ダイクシスの側からアプローチし、再帰代名詞「自分」と人称代名詞の選択に関して「照応に関する視点の原則」を以下のように定義している。

「語り手が場面の中に導入された登場人物に言及する場合、視点が語り手の側にあれば人称代名詞（「彼」、「彼女」など）またはその人物の固有名詞が用いられ、（意識主体としての）登場人物の側にあれば再帰代名詞「自分」が用いられる」。

なお、ダイクシス動詞については、澤田淳（2011）を参照されたい

用法（reflexivity）、視点的用法（viewpoint）及び話者指示的用法（logophoricity）の三つの用法があることを確認した。また、「自分」の再帰的な用法を同一節内で先行詞と指し示す対象が同一である「自分」の機能に限らず、述語が示す動作あるいは状態が行為者自身に向けられることを表すものとして定義した。その上で、「自分」が主格名詞句、対格名詞句、与格名詞句に生起する場合に分けて、その文法的な振る舞いを考察した。

主格名詞句に生起する場合には、照応的な用法と照応的ではない用法に大別することができる。そして、照応的ではない用法において、「自称詞」として用いられることが少なくないことも確認された。また、対格目的語として用いられる「自分」は主に精神的能力を伴う非物理的領域を表すが、物理的な行為や動作を表す述語にも用いられることがあり、特に二重「自分」構造（the double-zibun construction）において多く観察された。さらに、小葉（2017）で考察された再帰用法の「自分に」と共起する述語について、日本語の与格を取る動詞が必ず三項動詞であるわけではないため、全てが間接目的語として扱われることは適切ではないことを指摘した。例えば、「花子は自分に名札をつけた」という用例は再帰性を持つと認められるが、その再帰性は「自分に」の特性によってではなく、動作の着点を示す与格名詞の性質によって決定されると主張した。

（こう めいくん・言語科学研究室）

謝辞

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2119 の支援を受けたものです。本論の執筆にあたり、ご指導いただいた加藤重広先生から貴重なご助言を多くいただきました。ここに深く感謝申し上げます。なお、本稿における議論の不備や誤りについては、すべて筆者の責任であることを申し添えます。

参考文献

- 小葉哲哉（2017）「再帰用法の「自分」と述語の意味制約」言語文化共同研究プロジェクト、『認知・機能言語学研究（2）』2017, p.1-10.
- 澤田淳（2011）「日本語のダイクシス表現と視点、主観性」澤田治美（編）『ひつじ意味論講座5 主観性と主体性』、ひつじ書房.
- 澤田治美（2009）「直視的視点と小説に現れた再帰代名詞『自分』の解釈をめぐる」『「内」と「外」の言語学』、開拓社.
- 廣瀬幸生（2009）「話者指示性と視点と対比—日英語再帰代名詞の意味拡張の仕組み—」『「内」と「外」の言語学』、開拓社.

Geniušienė, Emma. (1987) The Typology of Reflexives, *Empirical Approaches to Language Typology*2, Mouton de Gruyter.

Hirose, Yukio. (2014) The conceptual basis for reflexive constructions in Japanese, *Journal of Pragmatics*, 68. コーパス類

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)